

第 23 回(2007 年度)マツダ事業助成
—科学技術振興関係—

活 動 報 告 書

財団法人マツダ財団

財団法人マツダ財団 設 立 趣 意 書

我が国経済はめざましい成長を遂げ、今日多くの国民が、日常生活の中で豊かさを享受しております。

これには、科学技術の発展のあずかるところが大きく、産業界も厳しい環境を克服し、高度の技術革新をすすめることでその一翼を担ってきました。換言すれば、天然資源に恵まれない我が国は、人びとの英知と勤勉さを資源として科学技術の振興を図ることによって、国際社会に伍し、社会経済の発展を成し遂げてきたといえます。このことは、未来社会においても同様であると考えます。

一方、急速な経済成長は、国の内外における様々な分野で新しい課題を提起してきました。工業化社会、さらには情報化社会の進展による社会環境の変化が、青少年の社会生活に多様な影響を及ぼしていることもその一つであります。物質的な豊かさが精神的な豊かさをもたらさず、むしろ青少年の心の荒廃を加速しているのではないかと指摘されています。心身共に発達形成期にある青少年の育成に、今まさに適切な施策や方途を講ずることが望まれる所以であります。

人びとが共に繁栄を分かち合い、心豊かに生きることのできる社会の実現を願うとき、調和のとれた科学技術の発展と、将来これらを担うべき青少年の健全育成とが相まって達成されていくことが大切と考えます。

マツダ株式会社は、新しい価値を創造し、人びとの喜びをひろげていくことを経営理念として社業に精励しておりますが、このほど実施した社名変更を記念し、併せて創立 65 周年を来年に控えたこの時期に、経営理念の一端を具現することを願って、科学技術の振興と青少年の健全育成のための助成等を主な事業内容とするマツダ財団を設立し、広く社会の発展に役立てようとするものであります。この財団の趣旨が我が国だけでなく、国際的なひろがりの中で活かされれば、これに過ぎる喜びはないと考える次第であります。

昭和 59(1984)年 10 月

目 的 及 び 事 業

目的:本財団は、科学技術の振興並びに次代を担う青少年の健全育成のための助成等を行い、もって世界の人びとが共に繁栄を享受し、心豊かに生きることのできる社会づくりに寄与することを目的とする。

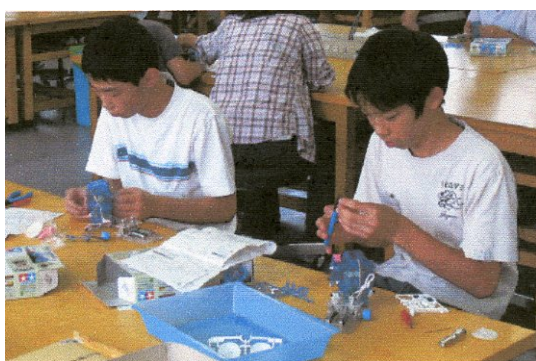
事業:本財団は、この目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 科学技術の振興に寄与する研究に対する助成
- (2) 科学技術の振興に寄与する研究及び開発に優れた業績のあった者に対する顕彰
- (3) 青少年の健全育成に寄与する研究並びに諸事業に対する助成
- (4) 青少年の健全育成に寄与する優れた業績のあった者に対する顕彰
- (5) 科学技術の振興及び青少年の健全育成に関する調査研究並びに講演会、シンポジウム等の開催
- (6) 外国人留学生の研修、研究、交流等に対する助成
- (7) その他本財団の目的達成に必要な事業

2007 年度マツダ事業助成一覧 ―科学技術振興関係―

県	場所		事業名	申請者 (肩書は応募時)	期間	ページ
島根	松江市	科学体験 事業開催	小・中学生のための手作りロボ ット工作	松江工業高等専門学校 准教授 箕田 充志	2007.7.16	4
山口	周南市	科学体験 事業開催	ミニプラネタリウムの製作	徳山工業高等専門学校 助教 鈴木 厚行	2007.7.28、 7.29	6
鳥取	倉吉市	科学体験 事業開催	中学生のためのやさしい電子 制御回路教室	米子工業高等専門学校 准教授 中山 繁生	2007.7.25、 7.31	8
広島	広島市	科学体験 事業開催	定期教育交流講座『HERO -Hiroshima Engineers Reaching Out-』	広島国際学院大学 工 学部 講師 渡邊 真彦	2007.7.28、 8.4、8.5	10
鳥取	米子市	科学体験 事業開催	レゴ®でレスキューロボットを作 ろう	米子工業高等専門学校 准教授 矢壁 正樹	2007.8.11、 8.12	12
鳥取	鳥取市	科学体験 事業開催	おもしろワクワク化学の世界 '07 鳥取化学展	鳥取大学 工学部 教授 斎本 博之	2007.8.1～ 8.6	14
広島	広島市	科学体験 事業開催	広島工業大学 第3回「ワクワクものづくり大作 戦」	広島工業大学 工学部 教授 池庄司 英臣	2007.8.11	16
山口	宇部市	科学体験 事業開催	ときわ科学教室 ―電気はどう やって作るの―	宇部工業高等専門学校 准教授 日高 良和	2007.8.26	18
島根	松江市	科学体験 推進研究 会開催	平成 19 年度全国地学教育研 究大会・日本地学教育学会 第 61 回全国大会島根大会 ジュ ニアセッション	島根大学 教育学部 教授 秦 明德	2007.8.18、 8.19	20
山口	美祢市	科学体験 事業開催	ロケット教室 ―大空へロケット を打ち上げよう―	宇部工業高等専門学校 准教授 仙波 伸也	2007.11.29	22
合 計 10 件				100 万円		

事業名		代表者所属	松江工業高等専門学校
07KJ-01		代表者	准教授 箕田 充志
小・中学生のための手作りロボット工作		開催地	松江市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時: 7/16 場所: 松江工業高等専門学校 対象: 小・中学生 参加者(人): 60 名(十保護者, 兄弟 33 名) 内訳(小中高の先生 0 人)(生徒;60 人) 内容: 事業計画の通りのスケジュールで事業を進めた。 募集は小・中学生合計 60 名とした。小学生 35 名, 中学生 25 名が参加した。祝日に行ったことから, 保護者や兄弟も多数見学した。 内容(計画通り) ①講義:モータや電子回路の基礎 ②実験:ロボット組み立て ③競技:完成したロボットを用いた競技 ④アンケート 講演; 件、発表; 件(電気学会中国支部連合大会で予定)、シンポジウム; 件		



製作過程



競技の様子



参加者集合

事業の目的・ねらい

近年、子供たちの理工系離れが叫ばれて久しい。松江工業高等専門学校が位置する島根県は、少子化の影響が深刻であり、県内の中学校を卒業する生徒の数は、数年後にはおよそ 5,000 名へと激減する。科学技術振興に力を入れることで、少子化に左右されることなく人材の地元定着を図ることが工業高等専門学校の一つの使命であると考えられる。本事業の目的は、小学校の高学年から中学校の早い時期にものづくりを伴う科学技術体験をさせることで、小・中学生に対し、効果的に科学技術へ興味を促し向上心を育む教育を行うと同時に、理科離れを改善することにある。

事業の概要

本事業はロボット作りを通じた科学体験であり、下記の項目に従って実施した。

①講義:モータ・電子回路の基礎、ロボット機構

工作の前に講義を行うことでモータ、電気の極性および電子回路のしくみを理解させた。また、ロボット機構やネジの規格、歯車のギヤ比等を解説することにより、小学校や中で学習した算数や理科が、ものづくりの場面でどのように用いられるかイメージをわかせることができた。

②実験:ロボット組立て

参加した生徒が、自分の手で動きのあるロボットを完成させるプロセスを経験した。参加した小・中学生は、普段の授業とは異なり、不思議に、思ったこと疑問をその場で質問し、ロボットをつくるプロセスを体験した。各自が時間内にロボットを完成させ、その動きに非常に満足していた。

③競技:完成したロボットを用いた競技

自分達で、作ったロボットを用いて実際に競技を行った。トーナメントでロボットボクシング競技を行いロボットが動く感動そして動かすことの難しさを体験した。

④アンケート

参加者の感想を表 1 に抜粋する。多くの参加者が非常に満足した結果となった。さらに、本事業を通じ理工学に対し興味を抱いた小・中学生が多かった。

表 1 参加者の感想

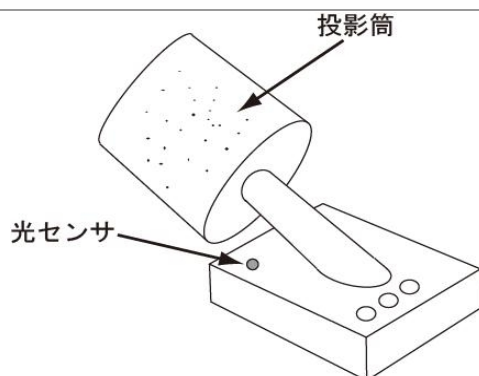
むずかしかったけど、いい結果でうれしかったです。	指導がていねいだった。ロボットを作ることが楽しかった。モータやギヤのことが勉強になった。
おもしろかったので、これからも開催してほしい。	小学生にも楽しく作れたし、作ったあと、友達と対戦できたりとても楽しかったです。
先生たちがわかりやすく教えてくれてうれしかったです。	作るのはむずかしかったけど、完成してうれしかった。
今までガンダムのプラモしか作ってなかったけど、ちがうやつを作って「こんな物があるんだな。」と思いました。	ロボットを作って友達とあそべてよかった。
初めてこういう工作をやってみたけど、とても楽しかった。	分からなかった時にていねいに教えてくれて良かった。
ロボットを作るのが楽しかった	最後にやった、トーナメントが楽しかった。
ていねいにおしえてもらって、うれしかったし、間違えたところも解決してくれました。	作るのは大変だったけど、楽しかったのでよかった。
とても楽しかったし、指示がわかりやすかった。	とてもおもしろくて良かったです。また参加したいです。
モータのしくみやニッパーの使いかたがよくわかった。	

結果及び効果

アンケートの結果から、本事業においてロボットを作ること、少年期から理工学への興味を与え想像力と創造力を養い科学技術への夢をはぐくむ一助となったと考えられる。

事業の中では、モータやギヤ等の説明で、学校で学習した算数や理科が、ものづくりの場面でどのように用いられるか思考を働かすことができた。また、全員が自分の手で動きのあるロボットを完成させ動かすプロセスを経験したことで、科学技術についての興味が一層増したと考えられる。

事業名		代表者所属	徳山工業高等専門学校
07KJ-03		代表者	助教 鈴木 厚行
ミニプラネタリウムの製作		開催地	周南市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時: (1日目)平成 19 年 7 月 28 日 (2日目)平成 19 年 7 月 29 日 場所: 徳山工業高等専門学校 テクノ・リフレッシュ教育センター 対象: 小学5～6年生 参加者(人): 25名 内容 ものづくり・科学技術の楽しさを体験すると共に大きなドームの中で製作品(ミニプラネタリウム)の動きに感動した		



ピンホール式プラネタリウム



教員の説明に聞き入る子どもたち



熱心に製作する子どもたち

事業の目的・ねらい

科学技術創造立国を目指す日本においては、子どもの科学技術に対する関心を高め、将来有為な研究者・技術者を養成してゆく必要がある。昨今、子どもの「科学技術離れ」「理科離れ」が指摘されており、早急に対策を講ずる必要がある。本事業ではものづくり・科学技術の楽しさを体験する場を提供し、夏休みの宿題対応講座として実施した。

事業の概要

本事業では小学校5、6年生を対象とし、プラネタリウムを製作する。プラネタリウムの製作を通じて天文学・電気電子工学・機械工学など幅広い科学技術に親しんでもらう。プラネタリムは星空を投映する投映機のしくみから、レンズ式とピンホール式に分けることができる。本事業では製作が容易なピンホール式プラネタリウムを製作する。原理は、明かりを使って物の影を壁に映す影絵と同じである。投影機は、星座のとおりたくさんの孔をあけられた投影筒(シリンダー)の中に電球を入れ、電球の光を小さい孔(ピンホール)を通して周りに映し出すことで星空を再現するしくみである。このとき、できるだけ鮮明で明るい星を投映するためには、光源はできるだけフィラメントが小さく明るいものであることが必要である。このプラネタリウムは非常に初歩的なものだが、星の動きを感じ、星の美しさを居間で手軽に味わうことができるのが特長である。なお、実施会場には投影用のドームを作成し、その場で動作を確認し星空を観測できるようにする。より科学技術の楽しさを体験してもらうために光源の自動点灯回路を備え、オルゴールキットを投影筒に取り付ける。つまり、光センサを取り付け、周りが暗くなったときに星が出るように、電球を自動点灯させる。そして、投影筒にオルゴールキットを用いて低速回転させることで、星の日周運動を表現するしくみとする。

結果及び効果

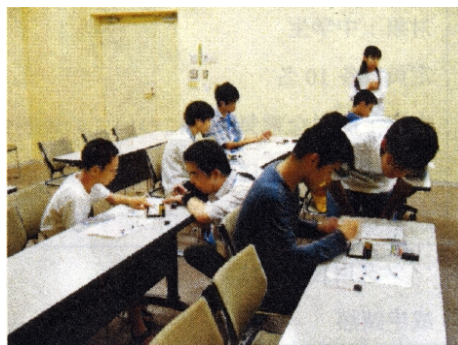
平成19年7月28日(土)、29日(日)にわたり小学校5、6年生を対象に徳山工業高等専門学校テクノ・リフレッシュ教育センターに於いて実施した。ダンボールで造った大きなドームを前にして、徐々に完成していくミニプラネタリウムが、どのように動いてくれるかを想像し、ものづくりの楽しさ、おもしろさを感じ取ることができた。ドームの中で光る星座の神秘さも体感できる学習となり、途中の退出者もなく計画どおり遂行することができた。

なお、工作終了後のアンケートでは、25名中18名が満足(普通7名)との回答を得、今後もまた工作教室への参加を希望したい意見も多数あった。

事業名		代表者所属	米子工業高等専門学校
07KJ-04		代表者	准教授 中山 繁生
中学生のためのやさしい電子制御回路教室		開催地	倉吉市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時: 平成 19 年 7 月 25 日(水) 場所: 鳥取県立倉吉未来中心 セミナールーム 2 日時: 平成 19 年 7 月 31 日(火) 場所: 鳥取県立県民文化会館第 4 会議室 対象: 中学生 参加者(人): (講師;延べ 4 人)(参加生徒;計 9 人)(アシスタント学生;延べ 3 人) 内容 簡単な電気回路についての説明をおこなう。次に主要電子部品に関する特徴と取り扱い方法について説明し、電子回路組立てに関する説明をおこなう。		



7 月 25 日 製作説明の様子



7 月 25 日 製作指導の様子



7 月 31 日 製作説明の様子



7 月 31 日 製作指導の様子

事業の目的・ねらい

本事業は中学生の理科離れ状態を打開すべく、中学生を対象に『ものづくり』のおもしろさを実際に体験させるものである。これは『ものづくり』を通して、家庭で頻繁に使われている家電製品における科学技術利用を

認識・理解することで、科学技術に対する興味を喚起することを目的とする。本事業は米子工業高等専門学校が位置する鳥取県西部を離れ、鳥取県中部および東部を拠点として出前形式で実施する。講座は本校電子制御工学科の教育内容に沿った内容とし、ブレッドボードによる電子回路の製作指導を主体としておこなう。

事業の概要

講座では、まず簡単な電気回路についての説明をおこなう。次にトランジスタやコンデンサなど主要部品に関する特徴と取り扱い方法について説明し、更に電子回路組立てに用いるブレッドボードについても説明をおこなう。組み立てをおこなう電子回路は次の通りである。

- ①：発光ダイオードを点灯させる回路
- ②：光センサ(CdS セル)を用いた、周囲が暗くなると電球が光る回路
- ③：②の回路にタイマ機能を付加した回路
- ④：2つの発光ダイオードを交互に点滅させる回路
- ⑤：④の回路の点滅周期を変更した回路

結果及び効果

講座終了後に参加中学生に対しアンケートを実施したところ、満足度の選択(①十分満足した、②だいたい満足した、③普通、④あまり満足しなかった、⑤まったく満足しなかった 以上 5 項目)において、全員が「十分満足した」と回答した。特に、抵抗やセンサーの働きがよく理解できたとの回答が目立った。また、今後どのような勉強がしたいかとの問い掛けに対しては、より多くの回路を製作したいとの回答が多く見られた。今回の講座により、参加した中学生のものづくりへの関心は、一層強くなったと思える。

事業名		代表者所属	広島国際学院大学 工学部
07KJ-06		代表者	講師 渡邊 真彦
定期教育交流講座『HERO-Hiroshima Engineers Reaching Out-』		開催地	広島市
		助成金額	10 万円
活動概要	①7 月 28 日(土) 10:00～12:00 テーマ:「ヨーグルト」が可能にする健康生活 講師:渡辺昌規(工学部バイオ・リサイクル学科講師) ②7 月 28 日(土)、8 月 4 日(土)13:30～15:00 テーマ:楽器を作ろう！～ギター編～ 講師:内海能亜(工学部機械工学科准教授) ③8 月 4 日(土) 13:30～15:30 テーマ:「空気」を使ったおもちゃ作り 講師:中村格芳(工学部バイオ・リサイクル学科講師) ※7 月 28 日(土)は講師の都合により中止し他の講座を紹介 ④8 月 4 日(土) 10:00～15:00 テーマ:音で遊ぼう～吹く楽器編②～ 講師:渡邊真彦(工学部バイオ・リサイクル学科講師) ⑤8 月 4 日(土) 13:00～16:00 テーマ:「アンテナ」を作ってみよう！ 講師:歌谷昌弘(情報学部情報工学科准教授) ⑥8 月 5 日(日) 13:00～15:00 テーマ:「ソーラーカー」を作ろう！ 講師:金本貴司(自動車短期大学部自動車工業科助手)、楠木良治(自動車短期大学部自動車工業科助教) 場所: 広島国際学院大学立町キャンパス 対象: 小学生～一般、参加者:61(人) 内訳(小中高の先生:未調査)(生徒:31 人) 講座 6 件(全 7 回)、講師:7 名		



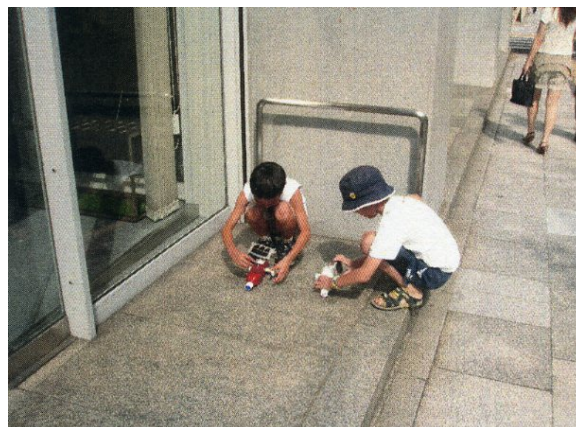
楽器を作ろう！～ギター編～



音で遊ぼう～吹く楽器編②～



「アンテナ」を作ってみよう！



「ソーラーカー」を作ろう！

事業の目的・ねらい

本事業は4年前から開始し、これまで230名以上の方々に受講していただいております。本年度で5回目の開催となり地域の皆様に多様な講座をご提供させていただいております。本事業、定期教育交流講座『HERO Hiroshima Engineers Reaching Out』は、小中学生や高校生などに対して、一般に広く使われている科学技術をやさしい実験などを通してその面白さを感じてもらうことを目的としています。またより高い年齢の方々には食と健康の正しい知識を知っていただく講座なども設け年齢を超えて楽しめる内容となっております。低年齢対象講座には毎年親子連れで受講される方も多く、短い時間ではありますが大変楽しかったと好評を頂いており、我々の励みとなっております。

『HERO』は本院の機械工学科、情報工学科、バイオ・リサイクル学科、自動車工業科など幅広い分野の専門講師で構成されており、各々の分野を活かした視点から毎年トピックを選定しております。また、それぞれの講座は幅広い年齢層の方々が受講しやすい内容・構成となるよう工夫を行っております。今後も我々HEROは広島県民に対して地域貢献を行っていく所存でございます。

事業の概要

低年齢層に対する物作りを主体とした講座編成を行い下記の講座内容にて実施いたしました。各講座はおおむね2時間から長いもので4時間程度となっており、十分物作り体験が楽しめるように設定しております。これまでのアンケート調査から小中学生対象の講座を増やして実施いたしました。参加者は61人で保護者を除いた受講者は32人で昨年並みとなりました。物作りの講座では参加された保護者にも手伝ってもらう形式のものや、保護者もお子様と同じ物を同時進行で作っていただく形式のものがありました。

なお、本講座は貴財団の他に広島県教育委員会ならびに広島市教育委員会よりご後援をいただきました。

HERO 2007 実施講座名・講師・参加対象者一覧

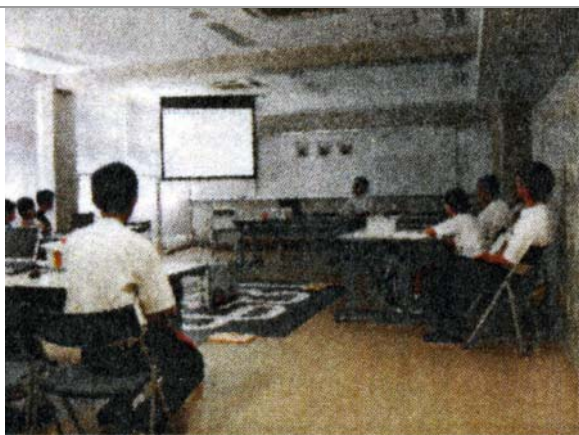
開催講座名	講師	参加対象者
「ヨーグルト」が可能にする健康生活	渡辺昌規 工学部バイオ・リサイクル学科 准教授	高校生以上
楽器を作ろう！～ギター編～	内海能重 工学部機械工学科 准教授	小学生～中学生
「空気」を使ったおもちゃ作り	中村格芳 工学部バイオ・リサイクル学科 講師	小学生～中学生
音で遊ぼう！吹く楽器編②	渡邊真彦 工学部バイオ・リサイクル学科 講師	小学生
「アンテナ」を作ってみよう！	歌谷昌弘 情報学部情報工学科 准教授	小学生高学年～中学生
「ソーラーカー」を作ろう！	金本貴司 自動車短期大学部自動車工業科 助手 楠木良治 自動車短期大学部自動車工業科 助教	小学生

結果及び効果

本講座「HERO」は今年度で5回目の実施となりました。これまでのアンケート結果および参加者の年齢構成を鑑み、今回は小学生でも参加可能な講座を全体的に増やしました。結果的に保護者数を除いた受講者数32人のうち、29人が小学生という結果になりました。夏休み期間ということもあり、多くの小学生が保護者の方々と参加して下さり、楽しい講座を実施することができました。毎年の傾向ですが、昨今大人と子供のふれあいが減少しているなか、年齢を超えて同時進行で同じ物を作り上げるという時間は非常に貴重であることを痛感いたします。このような経験から将来すばらしいチームワーク力を持った未来の科学技術者が育つことを予感させてくれます。

受講者の方々に記入していただいたアンケートの集計結果によれば、全体的に満足度が高く我々の今後の励みになる結果となりました。昨年同様受講者の興味はパソコンやITではなく「ものづくり」へシフトしていることがかなり明確になってきております。本講座は他の講座に比べ非常に独創的なコンテンツを毎回提供させていただいておりますが、今後ますます物作り要素の豊富な講座を提供するにあたって、内容が濃く且つ時間内で安全に楽しめるコンテンツを積極的に開発していく所存でございます。

事業名		代表者所属	米子工業高等専門学校
07KJ-06		代表者	准教授 矢壁 正樹
レゴ®でレスキューロボットを作ろう		開催地	米子市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時: 2007 年 8 月 11 日～2007 年 8 月 12 日 場所: 米子工業高等専門学校 対象: 中学生 参加者(人): 12 名 内訳(小中高の先生 0 人)(生徒 12 人) 内容: ロボットシステムを容易に構築することができるレゴ®マインドストームを用いて講義・実習を行う。これによりロボットシステムの概要を理解し、創造豊かな「ものづくり」を体験する。 講演:0 件、発表:0 件、シンポジウム:0 件		



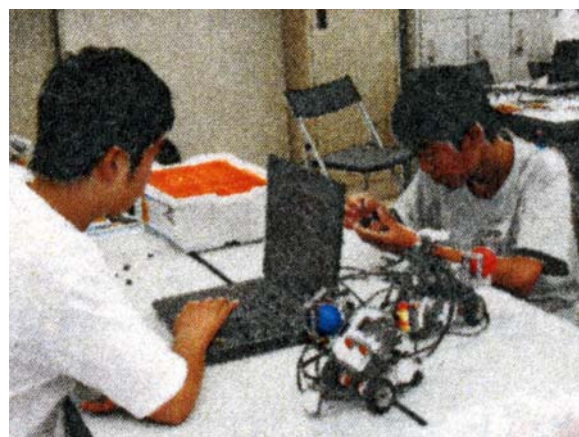
ロボットの講義



ロボットの組み立て



レスキューロボット競技



ロボット制御プログラミング

事業の目的・ねらい

ロボットシステムをレゴ(R)ブロックを用いることにより易しく学び、創造豊かな「ものづくり」を体験させることにより、日本の将来を担う中学生に科学・工学の興味・関心を高めてもらう。

事業の概要

ロボットシステムは日本の現在および将来にとって、必要不可欠な技術である。その本格的な理論および応用技術の習得は長期の学習を要するが、近年ではレゴ®に代表されるような身近なおもちゃにロボットシステムを導入し、容易にロボットシステムを体験・学習する事ができる教材が登場している。本事業では日本の将来を担う中学生に対し、ロボットシステムを容易に構築することができるレゴ®マインドストームを用いて以下の項目について講義・実習を行う。これによりロボットシステムの概要を理解し、創造豊かな「ものづくり」を体験する。

1. ロボットシステムの概要説明

ロボットはどのようにして作られているか、動くのか解説。

2. ロボット制御ソフトウェアの操作説明

ロボットを制御するソフトウェアの使い方を説明する。

3. 競技課題「レスキューロボット」の説明

競技課題「レスキューロボット」について説明し、参加者を5班に分け、班ごとにどのようなロボットを作り、どのように制御するか考える。

4. ロボットの組み立ておよびロボット制御ソフトによる動作記述

班ごとに考案したロボットを組み立て、ロボット制御ソフトにより、ロボット制御を行う。

5. 競技課題「レスキューロボット」によるロボット競技

各班で組み立てたロボットと制御ソフトウェアによって競技を行う。

6. 講評および班ごとにレポート作成

結果及び効果

ロボットに対する中学生の関心が高く、定員10名で募集したところ予想を上回る応募があり、教材数から考えて12名まで受け入れを行った。1つのロボットキットを三人の中学生が組み立て、課題に応じてロボットコントロールソフトウェアを作成しライントレースを行いながらいち早く緊急現場に向かうことができるかを競い合う競技をおこなった。はじめはキットを組み上げるという、いわばプラモデル作成的な興味から始めた中学生が多かったが、プログラミングによってロボットが動くこと、センサーから情報を得ることによって、ロボットの動作を変化させることができること等の仕組みを学ぶうちに中学生の興味対象は徐々にロボットの制御・プログラミングの方に向かっていった。4班に分かれたすべての班でロボットを自由に組み立て、プログラミングを完成させることができ、参加した中学生は全員がロボットに対する関心および理解が深まった。事業終了後のアンケートでは参加者の全員が事業内容に満足し機会があればまた参加したいとの結果であった。

事業名		代表者所属	鳥取大学 工学部
07KJ-07		代表者	教授 斎本 博之
おもしろワクワク化学の世界 '07 鳥取化学展		開催地	鳥取市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時 平成 19 年 8 月 1 日(水) ～6 日(月) 10 時から 18 時(6 日は 16 : 0 0 開場) 場所 鳥取大丸 5 階催場 対象 小・中学生およびその保護者、高校生等 参加者(人) 1963 人およびスタッフ約 110 人 内訳 (小中高の先生:挨拶できたのは 5 人) (生徒: 高校生以下 988、保護者・一般 975 人) 内容 12 のブースに分かれて合計 20 のテーマで演示・体験実験を実施した。その他に、所定の時間を決めて「化学実験ショー」も実施した。企業・公設試ブースは展示が 4 テーマ、展示・体験実験が 1 テーマで、あった。 会場出口において、本化学展に対する参加者の評価と、今後の化学展への参考のため、アンケートを実施した。また、それぞれの体験実験の記録としてスタンプラリーも実施し、生徒さんには「ワクワク化学博士」認定証を授与し、科学技術広報財団の元素周期表を記念品として贈呈した。		



講義の様子



人工くらを作ろう



カルメラ焼きを作ってみよう



ダイヤモンドを分子模型で作ろう

事業の目的・ねらい

次世代を担う青少年に科学技術の重要性、素晴らしさ、不思議さ、面白さ、自然環境との調和を化学の立場から紹介する。化学的な演示だけでなく実際に実験を体験してもらい、化学のおもしろさを実感していただく。その効果を増幅するために、保護者の方にも参加していただき、ご家庭に帰ってから話題になることを期待する。近年、子供達の理科離れが目立ちはじめて久しいが、日常生活に関連した化学現象の実験やものづくり、最新の科学技術の解説展示を通して、学校で学ぶ理科と身の回りで実際に役立っている材料、化学製品との繋がりをやさしく紹介すること及び、化学と自然環境とのかかわりについて「楽しさを触媒して」理解を促すことが目的である。

事業の概要

12 のブースに分かれて合計 20 のテーマで演示・体験実験を実施した。その他に、所定の時間を決めて「化学実験ショー」も実施した。企業・公設試ブースは、展示が 4 テーマ、展示・体験実験が 1 テーマであった。

各ブースのテーマ一覧(開催期間が記載されていないものは、すべて 8 月 1 日～6 日)

信号機のように色が変わる水(8 月 1 日～3 日)
人工いくらを作ろう(8 月 4 日～6 日)
空気のかで空き缶つぶし
化学の世界のぶよぶよ(身の回りのポリマーゲル)
赤外線のみみつ(8 月 1 日～2 日)
生活に役立つ電気と光の応用技術(8 月 3 日～4 日)
船を作って走らせよう(8 月 5 日～6 日)
カルメラ焼きを作ってみよう
においの様々な形
液体を分けよう赤ワインが白ワインに！
ミニライトを作ろう(8 月 4 日～6 日)、はねないマットであそぼう(8 月 1 日～3 日)
ガラス細工(8 月 1 日～3 日)
蝶のしおり(8 月 4 日～6 日)
おやじの手作り科学工作
自在カギ工作(8 月 1 日～2 日)
アルミ缶風車(8 月 3 日、6 日)
パラグライダー(8 月 4 日～5 日)
ダイヤモンドを分子模型で作ろう
蛍光色素を作ろう
インスタント電池を作ろう

展示

環境にやさしい化学を目指して
コンピューターをカミナリから守る！
抗ウィルスマスク 鳥取から世界へ翔け！
技術で創る地域と未来
見てふれて！おもしろ放送技術

結果及び効果

入場された方々の大半は、1 時間以上の滞在時間で知的体験を満喫されたようだ、った。会場出口において、本化学展に対する参加者の評価と、今後の化学展への参考のため、アンケートを実施したところ、「おもしろかった実験」については、「空き缶つぶし」と「カルメラ焼き」が 1 位 2 位を競っていた。3 日間のテーマでは、「人工いくら」が健闘していた。また、ブースを体験した記録としてスタンプラリーも実施し、生徒さんには「ワクワク化学博士」認定証を授与し、科学技術広報財団の元素周期表を記念品として贈呈した。実行委員会の中心を担ったのは鳥取大学工学部物質工学科の教職員・学生であったが、他の学部、中学高校の先生方、NPO 法人の方々の多大な協力をいただいた。大学内の科学啓蒙活動にとどまらず、地域の関係者と協力して実施できたことは、実施スタッフにとっても大きな成果で、あった。研究室での日常とは別の側面で、アルバイト学生のがんばりと成長にも著しいものがあった。貴財団からのご支援は大変有効に活用でき、本化学展の成功の基となり、心から感謝申し上げます。

事業名		代表者所属	広島工業大学 工学部
07KJ-08		代表者	教授 池庄司 英臣
広島工業大学第3回「ワクワクものづくり大作戦」		開催地	広島市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時: 2007 年 8 月 11 日(土) 場所: 広島工業大学内 対象: 小学生 参加者: 499 名 内訳(小学生;226 名)(保護者;273 名) 内容: 電気とあそぼう! ほか 11 講座 参加費: 各講座 300 円 後援: 広島県教育委員会、広島市教育委員会、TSS わんぱく大作戦 協賛: 財団法人マツダ財団		



からだのフシギにふれよう!



みんなのまちをつくろう!



橋づくりコンテストに参加しよう!



立体メガネで地球をみてみよう!

事業の目的・ねらい

今回貴財団より助成いただいた「第3回ワクワクものづくり大作戦」は、小学生を対象に、夏休みの宿題である「自由研究」「工作」の応援企画として実施しました。内容は、身近で親しみやすいテーマを題材とした、参加する小学生がものづくりの楽しさを実感・体感できる体験型講座で、参加者にとってのものづくりに興味を持つきっかけとなることを目的としました。同時に、当該行事の企画から実施までを本学の学生に担当させることにより、小学生には親しみやすく、そして学生にとっては自主性・創造性を育む機会となることもねらいとし

ました。なお、今年度は、低学年児にも取り組みやすい内容の講座を増やし、兄弟姉妹で参加しやすい体制づくりを目指しました。

事業の概要

■開催日時:平成 19 年 8 月 11 日(土)9:45～15:00

09 :45 開会式(学長補佐挨拶、注意事項説明)

10 :30 講座開始

昼食(1 時間程度)

15 :00 講座終了

■場所:広島工業大学内(附属図書館ほか)

■対象:小学生とその保護者

■参加費:各講座 300 円

■定員:各講座 20 名

■申込者数:239 名(小学生)

■参加者数:499 名(小学生 226 名、保護者 273 名)

■開講講座:計 12 講座 *()内は参加小学生数

〈全学年対象〉

・電気とあそぼう(20 名)

・世界にひとつのランプをつくろう(27 名)

・空気とあそぼう(18 名)

〈3 年生以上対象〉

・ペットボトルで風車をつくろう(17 名)

・虹色にかがやく万華鏡をつくろう(18 名)

・からだのフシギにふれよう(20 名)

・歯車でうごく時間割装置をつくろう(20 名)

・ミニハウスをつくろう(20 名)

・みんなのまちをつくろう(17 名)

〈4 年生以上対象〉

・橋づくりコンテストに参加しよう(18 名)

〈5 年生以上対象〉

・立体めがねで地球をみてみよう(18 名)

・絵に描いた車を走らせよう(13 名)

■主催:広島工業大学

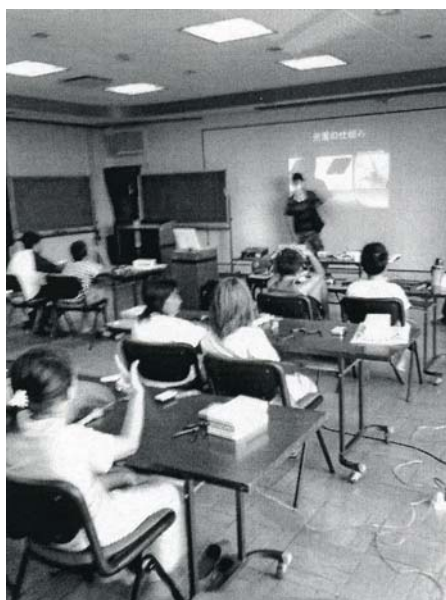
■後援:広島県教育委員会、広島市教育委員会、TSS わんぱく大作戦

■協賛:財団法人マツダ財団

結果及び効果

今回貴団体に助成いただいた「第 3 回ワクワクものづくり大作戦」は、小学生 226 名、保護者を含めると、約 500 名の参加者を得て、おかげさまで事故なく無事に終了することができました。参加者のいきいきした表情や課題に熱心に取り組む姿がとても印象的でしたし、参加小学生とその保護者を対象に実施したアンケートを見ても、「ものづくりを実感・体感することを通して、ものづくりに興味を持つきっかけとしてもらう」という本事業の目的は達成できたものと考えています。また、家に持ち帰った作品に更に手を加え、担当学生や教員の想像を超える力作を完成させて連絡を下さった参加者もあり、「ものづくりへの興味が持続する」講座を実施できたことを主催者として嬉しく感じています。加えて、本事業は講座の実施内容の検討から材料の購入、試作などの準備、そして当日の講座運びまでを本学学生が中心となってすすめることも特徴のひとつです。学生たちは、小学生の自主性を尊重しつつもケガのないようにとの思いから、何度も何度も試作を重ねて当日を迎えました。さらには作業が遅れがちな低学年児や、一人で参加する小学生が気後れすることなく楽しめるように、参加者の状況を勘案してグループ分けをするなど、実に温かく、細かい配慮をしていました。このような準備期間を経て当日を迎えたこともあってか、当日は参加者に積極的に声かけをしたり、参加者が困っているときはさりげなくフォローしつつも、参加者とともに楽しみながら講座を運営していました。この、学生の心遣いや熱心な姿勢は、参加小学生のみならず保護者からも感謝とお誉めの言葉をいただいています。こうして、学生が主となって講座運営を行うことにより、小学生にとっては「お兄ちゃんお姉ちゃんに教えてもらう」親しみやすさで楽しんでもらえ、また学生にとっても、企画を実行に移すに伴う困難や、「子供たちにわかりやすく教える」という日ごろとは異なる視点を経験する良い機会となりました。また、近年、地域であまり見られなくなった世代間交流の場となったのではとも思っています。本学ではこれからも、地域の方とふれあい、学びあえる催しを企画、実施していきたいと考えています。最後になりましたが、本事業に対し貴財団のご理解、助成をいただきましたことを心よりお礼申しあげます。

事業名		代表者所属	宇部工業高等専門学校
07KJ-09		代表者	准教授 日高 良和
ときわ科学教室 ー電気はどうやって作るのー		開催地	宇部市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時 2007 年 8 月 26 日 13 時から 17 時 場所 宇部市常盤ふれあいセンター2 階大ホール 対象 宇部市常盤校区内小学生 参加者(人) 20 人 内 訳(小中高の先生;0 人) (生徒;20 人) 内容 1. 開会行事:5 分 2. 電気の基礎と発電についてのお話:20 分 3. 手回し発電機(ラジオ・ライト付き)の製作と発電機の構造の学習:170 分 4. 発電機を使ったいろいろな実験:40 分 5. 閉会行事:5 分		



電気に基礎と発電についてのお話
(フレミングの右手の法則って?)



ラジオ・ランプ付き手回し発電機の製作
(半田付けは、難しい)



完成！ラジオ・ランプ付き手回し発電機
(ラジオは聴こえるかな?)



発電機の実験
(モーターの数で力が変わる？何故?)

事業の目的・ねらい

電気は、身近に使われているエネルギーのひとつである。しかし、最近の子ども達は、発電所や風力発電などの言葉は知っているが、電気がどのように作られているのかはあまり理解していないように思われる。本事業は、電気がどのような仕組みで作られるのかを講義やラジオ付き手回し発電機を組み立てながら学び、この発電機を使用した実験を行って、子ども達の電気技術への興味を喚起するとともに、科学技術振興活動への理解を広める機会とすることを目的とする。そして、電気技術の知識を学ぶと共に、電気回路の半田付け作業などを通じて道具の使い方など「もの」を作るための知識を身につけることをねらいとする。

事業の概要

本事業は、宇部高専と地域自治体の子ども育成団体である「わくわく常盤」とが連携して、子ども達へ科学技術の大切さを理解してもらえようとする体制として実施した。また、朝日新聞の山口地区の情報誌を発行している「おはようアサヒ山口編集局」にも協力を得て、事業の報道によって地域の科学技術振興の運気を高めるようにした。事業への参加者は、宇部市常盤校区内の小学生 20 名であり、実施内容は、次のようである。

1. 開会行事:5 分
2. 電気の基礎と発電についてのお話:20 分
3. 手回し発電機(ラジオ・ライト付き)の製作と発電機の構造の学習:170 分
4. 発電機を使った実験(波形を観察、複数の LED をつける、モータを回すなど): 40 分
5. 閉会行事 5 分

電気の基礎と発電についての話は、電気が家まで届く道のりや発電の種類、発電機の仕組み等を宇部高専の教員と電気工学科の学生 3 名がパワーポイントを使って説明した。その後、半田付けをしながらラジオ・ランプ付き手回し発電機の製作を行った。手回し発電機の製作は、部品や発電機の構造などを説明しながら実施したため予定の時間を 50 分ほど超過した。そのため、実験の時間が短くなったため、個別に実施する予定だった実験を演示方式とした。実験は、オシロスコープで作った発電機と乾電池が発生する電圧波形の観察、発電機による発光ダイオードの点灯や模型用モータを動かす実験を行った。

結果及び効果

参加した子どもたちは小学生 3 年生から 6 年生であり、電気が家に届くまでの事は理解していたが、電気がどのように作られているのか、家庭のコンセントの電圧など知らないことも多く、この事業によって身近な電気の事をよく理解できるようになると言う成果を得た。ラジオ・ランプ付き手回し発電機の製作では、宇部高専の学生やわくわく常盤のスタッフが指導し、部品の名前や半田付けの方法を説明しながら実施した。3 時間近くにおよぶ長い時間にわたっての製作であったが、根気強く物事に取り組む姿勢を学び、ものを作ることの大変さを実感するという当初想定していなかった良い成果を得た。モータの実験では、子どもたちに使用するモータの数で発電機を回す力が異なることを体験してもらい、その驚きや多くの質問などから電気技術や科学技術への興味を喚起するという所期の効果を上げることが出来たといえる。また、本事業では参加者の子どもたちに加え、保護者の方々、わくわく常盤の年配者のスタッフ、そして、宇部高専の学生と、幅広い年齢層の者が参加することとなったため、各世代に科学技術振興活動の理解を広める良い機会となった。そして、世代を超えた交流が出来たのも良い成果であった。

この科学教室のエピソードとして、完成したラジオ・ランプ付き手回し発電機を使用するときに、「発電機から音楽が出ている」と言う、ラジオを知らない子どもがいることには驚いた。家庭などでラジオを聴く習慣が無いことが原因であると思われるが、今後の科学技術振興活動には生活様式の変化も考慮して実施する必要があると感じた。

事業名		代表者所属	島根大学 教育学部
07KJ-10		代表者	教授 秦 明徳
平成 19 年度全国地学教育研究大会・日本地学教育学会 第 61 回全国大会島根大会 ジュニアセッション		開催地	松江市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時: 8 月 18 日(土) ～8 月 19 日(日) 場所: 島根大学教養棟 2 号館 対象: 高校生、大学生、教員、地学教育学会会員 参加者(人) 180 内訳(小中高の先生 100 人)(生徒 30 人) 内容: 地学教育にかかわる口頭発表、ポスター発表 口頭発表 4 件、ポスター発表 5 件		



サツマイモ文化とゼオライト



宍道湖の蜃気楼



鳴き砂海岸のポスター発表



蟠竜湖の成因

事業の目的・ねらい

高校生がプロの研究者や教育者の前で講演する機会を提供することにより、地球科学についての学習・研究活動をより活性化せるきっかけを得るとともに生の地学を知ってもらい、地学そして理科や科学の楽しさを感じてもらうことも重要な目的とする。また、参会者に、高等学校で停滞傾向にある地学分野の教育の楽しさや、可能性について考えていただく機会とする。

事業の概要

大会 1 日目にジュニアセッションとして 4 件の口頭発表を行った。ポスター発表は、地学教育学会の会員による発表と同一会場にて、合同で実施し、5 件の発表を行った。

1. ジュニア口頭発表

J01 鳴き砂の研究

柳梁孝英・樋野康障・川村洋喜(島根県立大田高等学校地球科学部)

J02 謎の湖幡竜湖の成因を解明する

岡崎臣・尾木紘之(島根県立益田高等学校理数科 3 年)

J03 宍道湖の屢気楼の分析

阪本佑・森脇崇史・谷口未来・松本萌美(島根県立松江東高等学校)

J04 サツマイモ文化に関するゼオライトの研究

泉原理・佐々岡素子・椿純一(島根県立矢上高等学校)

2. ジュニアポスター発表)

JP01 鳴き砂の研究

柳柴孝英・樋野康障・1 村洋喜(島根県立大田高等学校地球科学部)

JP02 謎の湖幡竜湖の成因を解明する

岡崎臣・尾木紘之(島根県立益田高等学校)

JP03 宍道湖の屢気楼の分析

阪本佑・森脇崇史・谷口未来・松本萌美(島根県立松江東高等学校)

JP04 気象現象のシミュレーション

江川大貴・妹尾有未・野津裕佑(島根県立松江東高等学校)

JP05 サツマイモ文化に関するゼオライトの研究

泉原理・佐々岡素子・椿純一(島根県立矢上高等学校)

結果及び効果

本ジュニアセッションは、19 年度の全国地学教育研究大会のプログラムの一つとして実施した。本企画は、島根県の高校からの全面的協力により実現した。島根県における高校地学教育は、科目としての授業がほとんど実施されていないという厳しい環境の中に置かれているにもかかわらず、課題研究や部活動では、意欲的で優れた研究活動がなされていることが、本企画を通して明らかにすることができた。本ジュニアセッションについては、新聞やテレビによる報道がなされるとともに、県内外の多くの参加者を得ることができたことも、今後の地学教育・理科教育の進展に寄与できることを期待できるものとなった。

事業名		代表者所属	宇部工業高等専門学校
07KJ-11		代表者	准教授 仙波 伸也
ロケット教室 ー大空へロケットを打ち上げようー		開催地	宇部市
		助成金額	10 万円
活動概要	日時 2007 年 11 月 29 日 場所 美祢市立東厚小学校 対象 東厚小学校児童と先生 参加者(人) 18 人 内訳(小中高の先生;4 人)(生徒;14 人) 内容 1. ロケットについての学習 2. モデルロケットの構造と飛行過程の学習内容 3. モデルロケットの製作 4. モデルロケットの打ち上げについて説明 5. モデルロケットの打ち上げ		



ロケットについて勉強します



モデルロケットの製作



低空飛行物体なし！ ロケット打ち上げ準備よし！



モデルロケットの打ち上げ

事業の目的・ねらい

本事業は、先端の科学技術を結集したロケットを取り上げて、科学技術に関する興味や「ものづくり」に挑戦する意欲を子どもたちに育むことを目的として実施する。また、対象を近隣に工業系学校が無く、科学技術に触れる機会が少ない学校へ変更して、そのような地域の子供たちに科学技術が身近なものと感じてもらえるような教室とすることをねらいとした。

事業の概要

本事業は、宇部高専電気工学科 5 年生(高専ロボットコンテストなどで活動している)からの要望によって、学生出身小学校で科学技術に接する機会が少ない美祢市立東厚小学校に変更して実施した。東厚小学校は、全校児童数が 14 名の小規模小学校であり、松浦大成校長をはじめとした先生方の協力を得て、午後の授業を総合学習の時間として本事業の実施を支えていただいた。また、地元のケーブルテレビである「美祢市有線テレビ」の取材も受け、この地域での科学技術振興に協力をいただいた。

実施内容は、次のとおりである。また、指導者は宇部高専電気工学科の教員 2 名と学生 4 名であり、この中には日本モデルロケット協会のロケット総合教育講習を受けクラス 3 のライセンスを持つ宇部高専の教員 1 名と学生 2 名を含み、安全な運営が出来るように努めた。

1. ロケットについての学習
2. モデルロケットの構造と飛行過程の学習
3. モデルロケットの製作
4. モデルロケットの打ち上げについて説明
5. モデルロケットの打ち上げ

学習では、学生たちが中心となりロケットの構造や推進の仕組み等を説明した。モデルロケットの製作は、児童を 4 班に分けて、それぞれの班を学生が指導するようにして行った。打ち上げは、2 台の発射台を使用して小学校のグラウンドで、行った。

結果及び効果

子どもたちは、高さ 30cm ほどのモデルロケットを見て、こんなものかという印象を持ったようであったが、ロケットの構造などの説明を受けるに従って、花火などで、使っている火薬が使い方によって本物のロケットを飛ばすことができる事や、ロケットに付いている羽根が重要な役割を果たす事が理解できたようで、授業の後では小さなモデルロケットがすごいと感じるようになっていた。このように、身近なものでも先端の科学技術につながって行くことを参加者の子どもたちが理解できるという成果を得た。そして、モデルロケットの打ち上げでは、打ち上げ時の音と 100m 以上も高く飛ぶロケットの姿を見て驚く参加者の顔から、科学技術への興味を促すと言う効果が得られたと言える。小学校の先生方からは、ロケットや航空工学など専門的なものでも説明の方法によって小学生たちにも理解してもらえるのだとコメントをいただき、本事業は先生方への刺激にもなったことが効果として挙げられる。

また、この小学校の出身者である宇部高専の学生にとっては、母校の教育活動と生まれ育った地域に貢献することが出来、意義深い事業であった。

第 22 回(2006 年度)マツダ事業助成一覧 - 科学技術振興関係 -

開催地	事業名	申請者 (申請者役職は応募時)	実施期間
周南市	「メカトロニクスロボットを作ってみよう」	徳山工業高等専門学校 助手 森崎 哲也	06.7.29、7.30
岡山市	農学部で学ぶ生命科学実験入門	岡山大学大学院自然科学研究科 助教授 田村 隆	06.8.1、8.2
津山市	中学校出前授業の教材開発と実施 ードップラー効果を応用したスピードガンー	津山工業高等専門学校 教授 鳥家 秀昭	06.6.1～07.5.31
広島市	定期教育交流講座『HERO-Hiroshima Engineers Reaching Out-』	広島国際学院大学工学部 助教授 内海 能重	06.7.29～8.2
松江市	小・中学生のためのロボット工作 ー科学技術に触れてみようー	松江工業高等専門学校 助教授 箕田 充志	06.8.24
岡山市	高分解能電子顕微鏡を操作して原子の像を 観ようーアインシュタイン博士も見たかったー	岡山理科大学 工学部 教授 助台 榮一	07.3.15、3.16
岡山市	サタデーサイエンスセミナー「きみも未来博士 になろう」	岡山大学大学院自然科学研究科 助教授 味野 道信	06.10.14、10.21
津山市	作ろう・飛ばそうモデルロケット	津山工業高等専門学校 助手 加藤 学	06.7.26～7.28
倉吉市	中学生のためのやさしい電子制御回路教室	米子工業高等専門学校 助手 中山 繁生	06.7.26～7.27
広島市	広島工業大学 第2回「ワクワクものづくり大 作戦」	広島工業大学工学部 教授 池庄司 英臣	06.8.19
広島市	日本比較免疫学会第 18 回学術集会関連特 別企画「高大連携講座:体験!免疫学プロ ティア」	県立広島大学人間文化学部 教授 藤井 保	06.8.18～8.24
合 計 11 件			110 万円

第 21 回(2005 年度)マツダ事業助成一覧 - 科学技術振興関係 - (公募助成)

開催地	事業名	申請者 (申請者役職は応募時)	実施期間
広島市	定期教育交流講座『HERO-Hiroshima Engineers Reaching Out-』	広島国際学院大学 工学部 助教授 内海 能重	05.7.30-8.7
広島市	「おもしろワクワク化学の世界'05 広島化学 展」	広島大学 大学院理学研究科 教授 大方 勝男	05.8.19-8.21
東広島市	2次関数を学習するための教具(理想流体の 強制渦運動の可視化装置)の開発	近畿大学 工学部 助教授 伊藤 昭夫	05.6.1-06.5.31
米子市	親子ふれあい科学教室	米子工業高等専門学校 助教授 権田 英功	05.7.24
宇部市	小中学生のためのメカトロニクス工作教室	宇部工業高等専門学校 講師 米澤 俊昭	05.8.23
岡山市	日本昆虫学会第 65 回大会公開シンポジウム (昆虫学の未来を担う少年達)	岡山大学 資源生物科学研究所 教授 積木 久明	05.9.25
米子市	実物大ブロックハウス教室	米子工業高等専門学校 助教授 高増 佳子	05.11.13
東広島市	サイエンスフェスタ 2005「科学を楽しもう」	近畿大学 工学部 教授 白石 浩平	05.11.26
宇部市	夢・化学21「身近で不思議な化学とバイオの 世界へー化学とバイオの体験学習ー」	山口大学 工学部 教授 山本 修一	05.11.26
広島市、 廿日市市	“いえ”と“みせ”と“まち”のリフォーム・ワーク ショップの実施	広島工業大学 環境学部 教授 森保 洋之	05.12.1-06.3.31
周南市	「電気を考えよう」	徳山工業高等専門学校 教授 室長 大應	05.12.23
合 計 11 件			110 万円

募集・応募・選出状況

2007年度は、以下により実施しました。

(1) 募集

次の内容で募集を行いました。

(a) 募集

学会・研究機関等が中国地方で開催する小中高の生徒を対象とした「科学体験」に関する研究会等で、科学技術振興に有意義と認められるものに対し、その費用の一部もしくは全額を助成。若手研究者を優先。

(b) 助成対象

2007年6月から2008年5月に実施される

- ・学会・シンポジウム等の「科学体験」推進に関する研究会の開催
- ・研究者による「科学体験」事業の開催
- ・「科学体験」に関する研究成果出版物の刊行、教材等の試作
- ・その他、「科学体験」に関し財団が有意義と認めるもの

(c) 募集・審査方法 事業責任者による申請方式、5月以降随時審査

(d) 対象地域 中国地方

(e) 助成金総額 100万円

(f) 助成件数 10件程度

ただし、同一機関への助成は年間2件以内

(g) 1件当たり助成金額 10万円

(h) 助成期間 1年

(2) 応募・選出状況

本年度は4月から募集し、2007年9月までに10件、100万円の助成が決定しました。

なお、応募件数は12件でした。

役員・評議員名簿 平成 20 年(2008 年) 7 月 1 日現在

財団役職	常・ 非常勤	名 前	役 職
理 事 長	非	山 内 孝	マツダ株式会社代表取締役副社長執行役員
専務理事	非	黒 沢 幸 治	マツダ株式会社常務執行役員
常務理事	常	山 根 英 幸	財団法人マツダ財団事務局長
理 事	非	浅 原 利 正	広島大学長
理 事	非	荒 川 詔 四	株式会社ブリヂストン代表取締役社長
理 事	非	上 田 宗 岡	上田宗箇流家元
理 事	非	大 田 哲 哉	広島商工会議所会頭
理 事	非	大 坪 文 雄	松下電器産業株式会社代表取締役社長
理 事	非	片 山 義 弘	広島大学名誉教授
理 事	非	川 本 一 之	株式会社中国新聞社代表取締役社長
理 事	非	櫟 本 功	広島大学名誉教授
理 事	非	藤 原 睦 躬	マツダ株式会社特別顧問
理 事	非	山 野 正 登	有人宇宙システム株式会社相談役
理 事	非	吉 田 典 可	広島大学名誉教授
監 事	非	友 田 民 義	あずさ監査法人代表社員・公認会計士
監 事	非	藤 本 哲 也	マツダ株式会社財務本部副本部長
評 議 員	非	赤 岡 功	県立広島大学長
評 議 員	非	石 井 威 望	東京大学名誉教授
評 議 員	非	唐 津 一	東海大学名誉教授
評 議 員	非	木 村 治 美	共立女子大学名誉教授
評 議 員	非	佐 藤 次 郎	財団法人日本語教育振興協会理事長
評 議 員	非	竹 林 守	マツダ株式会社相談役
評 議 員	非	西 澤 潤 一	首都大学東京学長
評 議 員	非	藤 井 明	株式会社広島テクノプラザ相談役
評 議 員	非	三 浦 房 紀	山口大学大学院理工学研究科長・工学部長
評 議 員	非	矢 野 薫	日本電気株式会社代表取締役執行役員社長
評 議 員	非	山 中 昭 司	広島大学大学院教授
評 議 員	非	山 西 正 道	広島大学名誉教授
評 議 員	非	山根 八洲男	広島大学大学院工学研究科長・工学部長
評 議 員	非	渡 辺 一 秀	マツダ株式会社相談役

(五十音順・敬称略)

第 23 回（2007 年度）マツダ事業助成
—科学技術振興関係—活 動 報 告 書

発 行 者 財団法人 マ ツ ダ 財 団

〒730-8670 広島県安芸郡府中町新地 3 番 1 号
マツダ株式会社内

Tel (082)285-4611

Fax (082)285-4612

e-mail mzaidan@mazda.co.jp

ホームページ <http://mzaidan.mazda.co.jp>
